

# FD NEWSLETTER



## CONTENTS

- FD活動は一連の教育改革の一つ
- FD研修会
- 公開授業
  - 長尾 譲治  
「公開授業の点数は？」
  - 西尾 誠示  
「公開授業を終えて」
  - モエ、R.A  
「Oral Communication」
  - 石橋 直樹  
「公開授業を終えて」
  - 岩崎 皇  
「外国語部門の公開授業について」
  - 石原 孝哉  
「公開授業を終えて」
  - 西村 祐子  
「公開授業の課題」
  - 岩崎 皇  
「公開授業に臨んであれこれ」
- ITを活用した教育改善の現状と課題  
「駒澤大学におけるe-ラーニングの可能性」
- FD推進委員会の今後の活動予定

## F D活動は一連の教育改革の一つ

駒澤大学FD推進委員会副委員長

副学長 川本 勝

1998年10月26日付で出された大学審議会の答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について - 競争的環境の中で個性が輝く大学 - 」において、「厳格な成績評価の実施と教育評価の実施の必要性」が謳われ、課題追求型の人材を育成する大学教育のあり方が提言された。大学の教育力・授業力が問われるようになり、今ではほとんどの大学が何らかの形でFDを導入している。本学のFD活動も3年目を迎えた。授業アンケート、公開授業、研修会などが実施され、FD推進委員会のもとFD活動は少しずつ定着してきたように思われる。

本年度のFD研修会(10月20日実施)は、国際基督教大学国際関係学科教授で、同大学のファカルティ・ディベロップメント主任のショウン・マラーニー氏を招いて行われた。その国際基督教大学は、授業評価をもっとも早くに導入した大学としてよく知られている。1974年頃から何人かの教員が私的に学生による授業・教員の評価を試みたのが始まりで、1988年には組織的に導入された。1990年代になって、多摩大学、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス、東海大学などで組織的に導入される。これらを契機に、その後、FDの議論が次第に行われるようになった。

私が大学教員になったのが1970年代後半、周りから、「先生は休みが多くて良いですね」、「好きな研究をして給料がもらえて良いですね」などと言われたが、確かに大学教員は、論文を書いて研究業績を上げ、教師としてのノルマを果たしていれば誰からも文句は言われない。大学では、小・中学生の時に経験した「研究授業」や「授業参観」はないし、ましてや学生による授業評価など気にすることなく、自分の好きなこと、専門領域を好き勝手に講義すれば事足り、正直良い職に就いたものだと思ったものである。

今では、そうした意識を変えない限り、問われている教育改革、大学改革はできないと自らを省みている。FD活動をわれわれ教員の意識を変える端緒としながら、実りあるものにしなければならない。そのためにも、目標をきちんと定めたFD活動を実施し、さらに、その成果を大学運営につなげていかなければならないと思っている。

## FD研修会

駒澤大学FD推進委員会では、授業改善や教育の質を高めることを目的として、さまざまなFD活動を行っています。その一環として、今年度は、FD活動に早くから積極的に取り組んでいる国際基督教大学（ICU）のFD主任を講師としてお招きして、FD研修会を次のとおり開催しました。

日 時 平成18年11月20日（月）16:30～18:00

場 所 駒澤大学 大会館2 - 1

テーマ ICUにおけるFD活動の現在と今後の展望  
(Faculty Development at ICU: Present and Future Prospects)

講 師 MALARNEY, Shaun (ショウン マラーニー)  
国際基督教大学国際関係学科教授 FD主任



講演中のMALARNEY, Shaun 教授

## Faculty Development at International Christian University

### The Theory and the Practice of FD Activities in ICU

- 1) FD's Goal: to create high quality faculty members who can provide a high quality liberal arts education to ICU students
- 2) To provide a supportive service that faculty can use to improve their teaching skills
- 3) To research and provide to ICU faculty members

awareness of the most up-to-date best practices in liberal arts education

### ICUにおけるFD活動の理論と実践

- 1) FDの目的とは、学生に質の高いリベラル・アーツ教育を提供するために、教員の質も向上するような活動を行うこと。
- 2) 教員の指導技術改善に役立つような支援を行う。
- 3) リベラル・アーツ教育の実践に関する最新情報をICUの教員に提供すること。

### Utilization of Course Syllabi

- 1) Faculty are required to post course syllabi on the ICU Intranet before term begins
- 2) The FD Office manages this process
- 3) The FD Office and Dean periodically revise the syllabus form to encourage best practices: for example, the recent inclusion of Learning Goals on the syllabus form

### シラバスの活用

- 1) 教員は、各学期開始前に、学内ネットワーク上にシラバスを公開しなければならない。
- 2) FD事務室は、シラバス公開に係る一連の作業を扱う。
- 3) FD事務室と教養学部長は、シラバス改善のため、定期的な様式の見直しを行う。  
直近の例では、シラバスに学習目標を明記するように改めた。

### Teaching Evaluation System (TES)

- 1) The FD Office designs the questions used in the TES with the assistance of the faculty
- 2) The FD Office administers the TES
- 3) The TES is explained to new faculty in orientation sessions
- 4) The FD Office works with faculty members who request assistance with their TES results

授業評価システム (TES: Teaching Effectiveness Survey 授業効果調査)

- 1) FD 事務室では教員の協力を得て TES の質問項目を作成している。
- 2) TES は FD 事務室で管理している。
- 3) 新任教員オリエンテーションにおいて、TES の説明を行っている。
- 4) TES の結果に関して、教員が何か支援を必要とする場合、FD 事務室が協力する。

### Development of Teaching Methods

- 1) New faculty are oriented to liberal arts education when they start at ICU
- 2) The FD website has links to websites that explain teaching methods and best practices for multiple disciplines
- 3) The FD Office offers training and assistance to faculty who request it
- 4) The FD Office sponsors training seminars on best practices: writing in the curriculum, e-Learning, etc.
- 5) The FD Office publishes the FD Newsletter that explains best practices and gives practical advice to teachers
- 6) The FD Library orders and holds a large number of books devoted to best practices in teaching
- 7) The FD Office attempts to provide a forum in which faculty members can share with each other successful teaching practices

### 教授法の開発

- 1) 新任教員は、着任時にリベラル・アーツ教育についてのオリエンテーションを受ける。
- 2) FD のウェブサイトは、教授方法や実践について説明しているサイトにリンクがはられている。
- 3) FD 事務室は、教員が希望する様々な支援を提供する。
- 4) FD 事務室は、より良い教育活動に資するようなトレーニング・セミナーを実施している。(例えば、授業における論文の書き方指導やEラーニング等を目的としたセミナーを実施)

- 5) FD 事務室は、教員同士の情報交換の場として「FD ニュースレター」を発行し、教育活動に関する情報やそれぞれのクラスで実践されている授業内容などを紹介している。
- 6) FD ライブラリーと称して、FD や教授法に関する書籍だけを収集し閲覧に供している。
- 7) FD 事務室は、教員同士の貴重なコミュニケーションの場として教員フォーラムを開催する。

### Consciousness Reform of Teacher

- 1) Orientation sessions emphasize the consciousness teachers need to teach liberal arts
- 2) The FD Office periodically organizes seminars on important topics: for example, teaching and working with special needs students

### 教員の意識改革

- 1) オリエンテーションの場を通して、リベラル・アーツ教育の必要性についての意識・理解を推進している。
- 2) FD 事務室では、定期的に重要トピックに関するセミナーを開催している。例えば障害を持つ学生への教育・指導について、当該の学生も参加して教員との意見交換を行いより良い授業運営を模索するセミナーを実施している。

### Connections with Other Universities

- 1) The FD Office frequently hosts guests from universities inside and outside Japan to explain FD activities at ICU
- 2) The FD Office has a public website about our program
- 3) The FD Office distributes the FD Newsletter to other universities

### 他大学との交流

- 1) 日本国内外の大学からの訪問者に対して、ICU のFD 活動を紹介している。
- 2) ICU のFD 活動を紹介するウェブサイトを公開している。
- 3) 「FD ニュースレター」を他大学に配布している。

## 【質疑応答】

講演では、リベラル・アーツ教育を推進する国際基督教大学（ICU）の理念に基づくファカルティ・ディベロップメントの方針と実態についてわかりやすい解説があった。

講演の後、参加者から様々の質問が出され、講師から回答がなされた。その主なものは次のとおりである。

## Q1 FDオフィスの体制について

A1 ICUの学部は教養学部のみであり、学部長付きの組織として設けられ、常勤の専任職員1名、非常勤または兼任の職員4名、および学生アルバイトを合わせた程度の要員構成となっている。

## Q2 FD委員会の構成について

A2 FD主任(マラーニー教授)と学部長補佐の他に、6学科、体育、日本語教育および英語教育の各分野からそれぞれ1名の委員で構成される。

## Q3 履修学生の少ない科目についても授業評価(授業効果調査)を行うかについて

A3 授業評価はすべての科目について実施することになっているが、履修者が極端に少ない科目では例外的に実施しない場合もある。そのような場合に実施しないことを決める権限は、担当の教員ではなく学生にある。

## Q4 FDオフィスが提供する教授法の情報は、リベラル・アーツ以外の分野にも適用可能かについて

A4 基本としてcritical thinking と active learning を主眼とする教授法であり、他の分野にも適用可能だと思うが、物理、化学等の自然科学は別かもしれない。

講師のマラーニー教授は、講演、質疑応答とも英語と日本語を組み合わせで説明されたが、ICUにおけるFDの理念と現状を良く理解することができた。今後、本学におけるFD活動をさらに

活性化させるための検討において参考となる事項も多いと思われる。(小委員会委員 GMS学部教授 苗村 恵司)

## 公開授業

「公開授業」の目的は、異なる学問領域の教員による工夫に富んだ授業に接し、その体験によるさまざまな発見を通して、今後の授業改善のためのヒントを得ることにあります。

平成18年度の「公開授業」は、学部等のFD推進部会のご協力により(表1)のとおり実施しました。

(表1)平成18年度 公開授業科目一覧

担当教員名	科目名	月日・曜日・時限
文学部 長尾 謙治	社会保障論	11月28日(火) 5時限
医療健康科学部 西尾 誠示	画像検査技術学基礎 実習	11月18日(土) 3時限
GMS学部 E.リチャード A.	Oral Communication	11月28日(火) 2時限
GMS学部 石橋 直樹	コンピュータワーク ショップ	12月4日(月) 2時限
総合教育研究部 石原 孝哉	総合V	11月16日(木) 4時限
総合教育研究部 落合 和昭	マルチ・メディア	11月21日(火) 5時限
総合教育研究部 大庭 直樹	マルチ・メディア	11月22日(水) 3時限
総合教育研究部 西村 祐子	英語 B(再)	11月16日(木) 3時限
総合教育研究部 塩旗 伸一郎	中国語 B	11月25日(土) 2時限
総合教育研究部 岩崎 皇	中国語 B	11月20日(月) 1時限
	中国語 B	11月22日(水) 2時限

とくに、総合教育研究部の外国語部門では、「視聴覚教材を利用した授業」というテーマを掲げて、6名の教員による公開授業が行われました。

なお、今回の公開授業を行われた教員より感想などをいただきましたので、掲載させていただきます。



「公開授業」を参観する教員

### 「公開授業の点数は？」

文学部教授 長尾 誠治

複数の学部・学科の先生方、また職員の方々に、私の公開授業にご参加いただきましたこと、あらためて感謝申し上げます。OB教員の一人として、普段から学生サービスの向上に興味・関心の強い私ですが、いざ自分の授業公開となると、さすがに少し緊張したのは事実です。でも、それもつかの間、すぐにいつものペースで授業を展開することができました。

私の授業では、普段からオリジナルの出席カードを用いて、学生に毎回必ず授業を7段階で評価してもらい、授業運営上改善すべき点、講義内容に関する質問などを記入してもらっています。質問や改善提案には、どんな小さなことでも必ず翌週の授業でフィードバックするようにしていますが、学生はそんな小さなことでも、「双方向性」を感じると、実に素直に反応してくれます。毎回評価をつけてもらうことも、はじめのうちはショックを受けることもありましたが、今では授業改善のための「宝」となっています。

当日の先生方の感想では、お褒めの言葉のほか、「寝ている学

生がいた」「全体としてやや単調」「もう少し問答形式を」などのご指摘を受けました。ちなみに当日の授業の学生からの評価点数（平均）は、7段階のうちの5.44。だいたいいつも通りの評価結果でした（先生方にもつけてもらえばよかった、と後になって思いました）。

FD推進の上で、公開授業は重要だと改めて感じています。次年度以降、私も積極的に公開授業に参加し、自分自身の授業サービス向上に役立てていきたいと思っています



社会保障論(9-390)

### 「公開授業を終えて」

医療健康科学部助教授 西尾 誠示

医療健康科学部は、11月18日(土)3時限に公開授業を行った。この授業は医療施設で行われるX線検査の基礎を学ぶことを目的としている。学内の実習では実際の受診者を対象にできないので、学生は人体等価ファントムを使用して撮影法、検査法とともに画像解剖を習得することになる。

このような他の学部とは全く畑の異なる授業内容を公開して、意味があるかやや懸念がありましたが、予想外のところで効果がありました。「公開授業」は学生にも前もって伝えてあったので、お互いに張り詰めた緊張感の中で行われました。学生は普段とは比較にならないほど熱心に聞き入り、機敏な反応を見せました。このように第3者が「観察」していることは、見られる側にとっては歌手や役者のように、動作も含めて「良く評価されたい」という気持ちが動くことは疑いのないことのようにです。

結果的には、教員同士がお互いに講義を聞き、その技術等について議論するという主旨からは、若干外れましたが、よそゆきの講義であっても指導方法を評価にすることは無駄ではないと思います。教員がお互いに講義を聴講しあうことは米国では頻繁に行われており、お互いに参考にしていると聞きますが、自分の授業に他の教員が参加していることは学生の緊張感を生むと同時に、学生に対する誇りにもなると考えています。

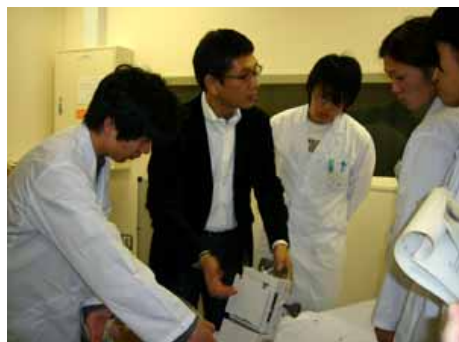
今回は、公開授業の意図するところには至りませんでした。このような活動を地道に継続することによって、学内にFD活動が浸透し、それが大学の評価に繋がれば嬉しいことだと思っています。

医療健康科学部

公開授業開催案内



西尾 誠示助教 骨撮影講義(7-108)



谷口 貴久非常勤講師 CT検査(7-102)



長谷川 武 非常勤講師 頭部断面分枝体講義(7-110、111)

「 Oral Communication 」

グローバル・メディア・スタディーズ学部教授

モエ, R.A.

This course utilizes the Timed Paired Practice (TPP) invented by me. It is a program that requires students to spontaneously use the English they know in extemporaneous conversations.

Students are randomly paired, converse until a mistake is made they do not notice, at which time the conversation is stopped and the error pointed out. The computer then randomly calls up another pair. TPP teaches students how to converse naturally in English and at the same time provides empirical data upon which evaluations are based.



Oral Communication (1-501)

## 「公開授業を終えて」

## グローバル・メディア・スタディーズ学部

## 非常勤講師 石橋 直樹

プログラミング言語の発展的利用を目的としたコンピュータ・ワークショップ(今期から開講)において、公開授業という貴重な体験を通じ、ご参加いただいた教職員の皆様から多様なご意見をいただきました。本質的な課題として、「人数制限のない実習の講義において、履修者が過多となった場合、その人数に応じた補助員が必要である」というご指摘を多数いただきました。本講義は約80名の履修者がいるが、これは単一の教員、ならびに、補助の教員という二名のみでは、学生一人一人への個別な対応が切実に困難となっている。「毎講義の出席・進捗を電子的に報告させているが、この仕組み自体が効率的」というご感想もいただきました。本講義の履修人数を前提とした場合、個々の学生のフォロー、モニタリングが弱くなるとの予想があったため、講義に先立ってWebによる厳密な出席管理、ならびに、成果物の細かな報告を行わせる課題提出システムを構築し、本講義において運用している。



コンピュータ・ワークショップ(1-201)

## 「外国語部門の公開授業について」

## 総合教育研究部FD推進部会委員

## 総合教育研究部助教授 岩崎 皇

外国語部門教育改革委員会(=FD作業部会)では、以前にも公開授業実施が提案されたことがありましたが、その時は「何のために」という理由付けが十分にできず実現しませんでした。今回、FD推進委員会委員長である学長の要請を受け、再度検討した結

果、テーマを設けた研究授業ということで、ようやく実現することができました。

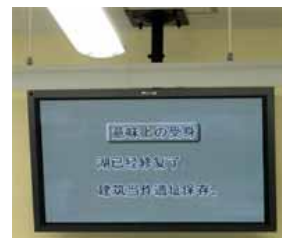
「視聴覚教材を利用した授業」というテーマは、直接的には「学生による授業アンケート」の中に「視聴覚教材は適切に使われていましたか」という質問項目があることによります。当初、外国語教員の中に、この質問項目は不適切だという意見がありました。視聴覚教材を使っていない授業では、このような質問は無意味ではないかということです。これは、やったことに対して意見を聞くというのが授業アンケートであってみれば、まったくもっともな意見と言えます。

しかし、授業改善という大きな流れの中で見ると別の見方もあります。即ち、「視聴覚教材を利用した授業を行うよう求められている」という見方です。これは、外国語教育に求められるものが、従来の本を読むことより、聞く・話すという会話的なものへ関心が移ってきていることと関係しているのでしょう。

今回は、公開授業の期間を11月16日(木)より29日(水)までとし、最終日に意見交換会を開きました。担当教員は6名7科目でした。参観者は延べ27名、その内教員は16名でした。

参観者の人数が少ないのは、語学科目が固定した時間帯に集中して開講されているため、自分の授業があって参観できなかったとも考えられますが、現時点での関心の程度が反映しているかと思われま。しかし、参観して得るものは確かにあり、教育改革委員会では、来年度も今年度の経験を踏まえ実施する予定です。

最後に、公開授業を行った教員から設備面の問題が指摘されたことを報告します。これは、せっかくの設備が使いにくいという問題です。PC教場やAV機器の鍵のこと、DVDリモコンの操作性など、実際に使用している教員の意見を聞いてもらいたいことであり、今後そのような機会が設けられることを期待しています。



## 「公開授業を終えて」

総合教育研究部教授 石原 孝哉

FD 推進部会委員からは、「いつもの授業をしていただければいい」とのお話でしたので、資料も学生に配布しているもののほかには作成しませんでしたし、授業も特別なことはしませんでした。もっと日常的にほかの先生の授業を自由に、気楽に見学できたら良いとかながね思っています。

今回見学いただいた先生方は、質問などを遠慮されていたようですが、わかりにくい点や、不明な点などをご指摘いただけたらありがたかったと思います。特にマイクの故障などはその場でご指摘いただければ、それなりの対応ができたのに、とちょっと残念でした。また、ご意見、ご批判などは今後の授業に有益なので、後ほどでもお聞かせいただけたらありがたいと思っています。

なお、今夏、教場のパソコンが撤去され、自分のノート型パソコンを持ち込んで授業していますが、10 分間の休み時間の間に立ち上げて必要な画面を用意することができませんし、デスク型パソコンに比べて能力が低く、多くの画面を同時に立ち上げながら説明するのにも不自由しています。授業で使うためのパソコンを据え置き型で設置していただき、個人のものは補助的に利用できるような設備にいただけたらありがたいと思っています。



総合 (1-302)

## 「公開授業の課題」

総合教育研究部教授 西村 祐子

公開授業をおこない、その後の反省会にも出席してみたいいくつかの問題点が目についた。まず「どんな授業でも人の授業をみる

ことは参考になる点があるのでためになる」というFD推進部会委員の言葉がある一方、自主的に参観する教員が少なかったことである。それならばこれからは全教員に、最低1、2度は公開授業を受け持つようにしてもらったほうがよいのではないだろうか。それではじめて当事者意識も芽生えるだろう。また、「何のためにおこなう公開授業なのか」という点は反省会でも依然として曖昧なままだった。公開授業はモデル授業とは異なっているはずであり、私ば「普段どおりの授業をしてください」といわれた。このため学生にも公開授業についての情報はわざと伝えなかった。公開授業をひきうけてくださった先生方にもそのように伝えた。だが、学生に「来週は公開授業だから遅れないように」とか「活発に発表するように」といった要請をあらかじめだしておいたという教員も少なくなかったようである。このこと自体、FD推進部会からだされていた「普段どおりの授業をおこなってほしい」という要請とは異なる。(だが、委員からは、それにもかかわらず学生たちは従来と変わらない態度だったのでがっかりしたといった声もきかれたが・・・)今回の公開授業が「モデル授業」ならばそのようにはじめから位置づけるべきであろうし、それならば学外から人を呼んで上手な授業をしてもらうことも可能であろう。しかし学生へのサービス向上の一環として考えるならば、なるべく普段と同じ状況で、授業の目標は何なのかを参加者に伝え、担当者が直面している現実的な問題をそのままみせるほうがよいのではないだろうか。むろん少しでもよくみせたいというのは教員の性であるけれども、そこに他者の目が加わることで「思わぬ改善の糸口」があるかもしれないのだから。



英語 B (再) (4-302)



## 「メリットだらけの公開授業」

総合教育研究部教授 塩旗 伸一郎

自分の授業は、わざわざ見に来てもらえるほどの工夫もないし、うまくいってもいない。しかし、外国語部門で実施すると決めたからには、名乗り出て取り組みを盛り上げたいと思った。何も特別なことをする必要はない、いつもどおり普通に授業をすればいいのだと背中を押され、手を挙げた次第。

日程が近づくにつれ、同じ畑の専門家から呆れられたり、「外国語の授業はこの程度か」と学部教員を失望させたりしないかという不安が頭を上げた。いざ実施してみると、自分も学生も予想以上に緊張したのか、ふだんの和んだ雰囲気と多少勝手が違い、それを活性化させようと予定外のプログラムを入れたりして、前夜つくったプリントを使う前に時間が来てしまった。

それでも、参観に見えた方の意見・感想・アドバイスはまるで宝物をもらったような気がしたし、他の公開授業を見学させてもらえたことで、ずいぶん参考になった。つまり見る側も見られる側もメリットだらけの企画が公開授業である。

参加者が期待(?)に反して少なかったことは今後の課題だが、企画が学内に認知されていなかったのだろう。次回はもっと宣伝を工夫する必要がある。参加者を増やそうと義務づけへ向かうなら、デメリットに転じる恐れがある。第2回FD研修会での名言「避け難い趨勢だからとFDを導入しても何の効果もない」を思い起こすべきだろう。



中国語 B (7-304)

## 「公開授業に臨んであれこれ」

総合教育研究部助教授 岩崎 皇

授業の効果に影響を与える要因として、学生自身のその学科に対する興味が一番大きいように思う。もちろん、多くの学生の「やる気」は最初から決まっている訳ではない。面白ければ「やる」、そうでなければ「やらない」という単純な原理に従っているように見える。そして、学生が授業を面白いと感じるのは「分かった」という感覚と、授業自体の適度のスピード感にあるように思う。

語学の授業でこの「分かる」を追求すると、ビデオなどの映像教材に行き着く。言葉を言葉で説明するやり方は、目隠しをして物の形を見ようとするような趣がある。これは一種の難行苦行ではなかるうか。あるいは、普通と違った特殊な能力を必要とすることなのではあるまいか。

公開授業をやった感想はといえば、意外なほど何でもなかったということである。うすうす感じていた指図は受けたが、こちらの意図と折り合いをつける努力は今後の課題である。見られて恥ずかしいという気持ちは慣れの問題だろう。

それより、人の授業を見ると自分では考え付かないことがあって面白い。今回も教科書をバラバラにして提出させるのを見て驚いた。確かに、語学のテキストは読むより使うという類のものかも知れない。早速真似してみようと思った次第である。



中国語 B (7-302)

## IT を活用した教育改善の現状と課題

### 「駒澤大学における e-ラーニングの可能性」

IT を活用した授業支援小委員会委員長

経営学部講師 日野 健太

2006 年度より、「IT を活用した授業支援小委員会」という委員会が、総合情報センター運営委員会を親委員会として設置されました。誰もがその名前を知っている F D 推進委員会に較べると、吹かなくても飛ぶような軽量級(委員長が)委員会ですが、インターネットを教育に活用する e-ラーニングの是非、方法について検討しています。

今や、授業アンケートも e-ラーニングも、多くの大学で導入されていますが、本当のことを言うと、私は懐疑的でありました。結局、大学の講義の質は、教員個人がどれだけ専門分野にこだわりを持っているかと、それを学生に伝えることにどれだけ熱意を持っているかの関数であって、アンケートさえすれば、ネットさえ使えば、という発想に陥っちゃうんじゃないか、と(今でもそう思っているところがある)。

しかしながら、事務局である総合情報センター情報メディア係が用意してくれた資料を眺めるうちに、e-ラーニングならではの教育効果も高いのではないか、と思えるようになってきました。また、個人的実験的試行として講義ブログをつくってみたり、夏休みの課題をつくってみたりしたことから考えたこともあります。自分の担当しない科目について口を出すのは「タブー」であることはわかっています。でもかつて学生だった立場から、ちょっと書かせてください。

例えば、家に帰って、web で復習用の画面を開き、「Ich möchte einen Kaffee.」などと口の動きを見ながら ö の発音の練習をすれば、ドイツ語がより上手に、少なくとも好きになるのではないのでしょうか。家に帰ってテープを聴きなさい、NHK のドイツ語会話を見なさい、と言われても聴かない、見ない学生でも、復習したか否かが把握され、成績評価に加味されるとなると、否応がなしにパソコンに向かうはず。高校で一年間ドイツ語をとって

(都立高校には、随意で第二外国語の科目を履修できるところがある) 語学は予習・復習が大事だよな、ということは充分わかっていつつも、山歩きに興味があって、そうしなかった大学生活を振り返って、そう思うのです。

また、簿記の練習もおもしろそうです。経営学部では簿記の授業で仕分の仕方を習います。さて、家に帰って復習です。熊本商店で切手を 1,000 円買って、現金で支払った場合、どうやって仕分すればよかったんでしたっけ? えっと、現金の貸方に 1,000 (切手) って書いて、借方はどこに書けばいいんだろう? あれ、切手なんて項目はないぞ? なるほど、これは通信費に仕分けすればいいのね、など。理屈を教わっても、実際に問題を解いてみないことには身に付かない簿記や数学、ゲーム論の分野でも、威力を発揮しそうです。

組織行動論や心理学の分野では、組織現象やパーソナリティの測定に質問紙を使います。私も、「権威主義的なひとは、自発や参加よりも指示されることを好む、ってことが明らかになってるんだよね。だから、参加的経営がいつでもモチベーションを向上させるというわけではない。ところで、権威主義の程度っていうのはアドルノの F 尺度っていう質問紙を使えば測定できるんですよ。」などと講義することがあります。その時、頭をかすめるのは、ネット上に F 尺度を用意してやって、全体の中での自分の権威主義の程度がわかったら、学生たちはこの問題をより身近に感じるんじゃないか、ということです。

さて、e-ラーニングには、ネットにつながっていればどこでも学習可能で、教員側が学生が課題に取り組んだか否かの確認をできる、という特長があります(図表 1)。

(図表 1) e-ラーニングの特徴

- 時間・場所にとらわれることなく学習できる。
  - 自宅学習の促進
  - 社会人学生などのニーズに対応
- 反復練習に効果絶大。
  - 各種試験対策・語学などで効果を発揮
- 学習状況の確認が容易。
- オンラインで情報処理可能。
  - 自宅学習を成績に加算することが容易に
  - 評価の手間、教員の事務処理量を軽減

その特長を踏まえてみれば、現在小委員会で検討中の e-ラーニングと対面講義とのハイブリッドでの活用が、高い効果を上げそうなのは、次の3つの条件のいずれかに当てはまる科目です。

### 1. 継続的な自宅学習が教育効果を高める科目

e-ラーニングの強みは、ネットを通じて教材を提供し、自宅でも予習・復習が可能になることです。また予習・復習の有無を教員側がデータとして蓄積できることです。学生たちが学業以外にも関心事が多いという現実を鑑みるに、欠かさずパソコンに向かわせるためには、成績評価に結びつくというアメとムチが必要なようです。これは、私が自身の講義ブログの閲覧数から得た知見でもあります。

### 2. 反復学習やレポート提出を必要とする科目

教場では時間の関係上、練習問題に時間を割くことが難しい、ということがあります。また、教場で答え合わせに時間を割いたり、回収した答案を採点して返却する、であるとか、それをチェックして成績評価に加味することが、難しいぐらいの大人数の受講生がいる場合もあります。また、そのような場合、メールでのレポート提出も非効率的です。e-ラーニングならば、提出状況が表計算ソフトに出力されるシステムも提供可能です。

### 3. 受講生の反応を統計的に処理してフィードバックすること自体が教材となる科目

教場で紙ベースで調査を行い、研究室に帰って入力して・・・ということは大変な負担になるはず。ネットを使えば、情報処理は格段に楽になるはず。

さて、当小委員会での討議を経て、事務局である総合情報センター情報メディア係では、e-ラーニング導入のための実験的試行の準備を進めています。流行だから飛びつく、というわけではなく、実際に取り組んでみて、ノウハウを蓄積する必要があるからです。もし、今後教場不足を解消するために全面的に e-ラーニングを活用しよう、とか、「えっ、駒澤大学では e-ラーニングも

やっていないの？やっぱりね・・・。」と言われるような状況がやってきた場合、そうってから検討を始めたのでは遅いと考えているからです。

来年度・再来年度の二カ年計画で、インストラクショナル・デザインという発想の下に、つまり分析に基づいて計画を立て、実行、そしてフィードバックを得、授業自体をより充実させる取り組みを、いくつかの実際の授業で行うことを計画しています(図表2)。

(図表2) インストラクショナル・デザイン



教育に、PDCA(Plan→Do→Check→Action)を意識的に取り入れようとする試み。もちろんe-ラーニングについてのみ用いられる用語ではない。

しかしそうは言っても、教員個人が徒手空拳で取り組むには、荷が重すぎる課題です。についてはセンター予算を活用し、外部から教育工学の専門家“インストラクショナル・デザイナー”を招聘し、どのようなタイミングで、どのような教材を作成するのか(例えば映像の活用はどのような場合に効果的なのか、一回の学習時間はどの程度がよいのか)成績評価にはどのように加味するのがよいのか、また対面授業を代替するような使い方は可能なのか、どのようなサポートスタッフが必要なのか、などについての助言を得、教材作成などの教員の負担がなるべく小さくなるような方法を模索しております。

特に、上記の条件1.2.に当てはまる授業をお持ちで、e-ラーニングのために一肌脱いでやろうか、という先生方、なにとぞご協力のほどをお願いいたします。

また、さらに大きな問題について検討しなければならない、という認識を持っています。現在、e-ラーニングだけで単位を与える科目を設置している大学がすでに存在しています(図表3)。上記のように教場不足を解消するひとつの方法になるかもしれ

ません。また、全国に散らばる推薦入試の合格者に対するリメディアル教育が求められるようになれば、その方法として活用できるかもしれません。

以上の点については、カリキュラムの編成権が学部にある以上、各学部の新執行部の先生方が、どのようなお考えをお持ちなのかを調査しておく段階だろうと当委員会では考えています。各委員がヒアリングに伺うことになると思います。

(図表3)他大学での導入状況

(資料出所: e-ラーニング白書2005/2006年版)

機関名	対象	対象人数	特色
早稲田大学	人間科学部	約170名	e-ラーニングで学位取得
東京工業大学	学内外の連携(特にアジア)	数十名(タイ)半期あたり 2~300人(高大連携) 200人(交流講義の一部)	国内外の他大学、高校との連携
東北大学	全学	-	国立で全学規模
玉川大学	全学	約15,000人(半期)	段階的に全学規模へ
阪南大学	全学	約6,000人	既存システムとの連携とポータル運用
阪大フロンティア研究機構	特に企業人	-	新規事業
八洲学園大学	全学	430人	e-ラーニングで学位取得
東京海洋大学	学部英語教育	-	英語教育
青山学院大学	理工学部	-	自動学習システム
中小企業大専科(東京校)	通信教育(中小企業)	約500人	通信教育事業のIT化

さて、ここまで e-ラーニングの可能性と小委員会の取り組みについて述べて参りました。「小さく始めて、必要であれば大きく展開することに備えておく。」私たちに、そんな戦略が必要だと感じております。ご助言を頂ければ幸いです。

最後に、IT を活用した授業支援小委員会に紙面を割いてくださった駒澤大学FD推進委員会に感謝します。ありがとうございました。

## FD推進委員会の今後の活動予定

平成18年度第7回小委員会

平成19年1月25日(木)

FD活動についてご意見がありましたら、学部等の小委員会委員までお申し出ください。

## 編集後記

FD NEWSLETTER 第9号をお届けします。今号は11月~12月にかけて行われたFD研修会や公開授業のレポートが中心となっています。

FD研修会では、FDに早い時期から取り組んでいる国際基督教大学から講師としてマラーニー先生をお招きしました。FDを実施するに当たって、授業アンケートのみならず、教授法の開発や教員の意識改革など、さまざまな仕組みを大学内に作っているということでした。やはり、FDを充実させるには相当な労力と時間がかかると、あらためて感じました。

公開授業を実施された先生方の原稿を読みますと、公開授業を行う側にも、また参観する教職員の側にも大きなメリットがあるという意見が多く見られました。このような公開授業によって、多くの授業運営の仕方に触れて、さまざまな方法があるということを確認し、刺激を受けるのも良い機会でしょう。

また、e-ラーニングと教育との関係について、「ITを活用した授業支援小委員会」よりご寄稿いただきました。本学でもe-ラーニングの充実は大きな課題です。さらに、FD活動においても、ITを活用することによって、より充実したものになると期待できます。

最後に、本号にご寄稿いただいた先生方に感謝申し上げます。

(佐藤秀孝、中村公一)

## FD NEWSLETTER Dec.2006 第9号

発行日: 2006年12月20日

発行者: 駒澤大学FD推進委員会

〒154-8525 東京都世田谷区駒沢1-23-1

03-3418-9867 Fax 03-3418-9037

(事務局: 総合企画室)